

▲紹介▼

向井芳樹著

『近松の方法』

本書は向井芳樹氏の従来近松研究をまとめたものである。全体は、Ⅰ近松時代浄るりの方法、Ⅱ近松世話浄るりの方法、Ⅲ近松研究史、Ⅳ景清の四章からなっている。

第一章には、従来、荒唐無稽、分裂的等と否定的に評価されてきた時代浄るりを理論的に再評価した先駆的な論文が収められている。向井氏は時代浄るりという用語を世話浄るり成立以降の作品に限定して用い、五段組織という上演形式が固定し、三段目に身替り、諫死等の悲劇的場面が定着した戯曲形式を備えるようになる時期の作品を対象にしている。「身替りの論理」では、三段目の身替りの趣向の理論的再評価がなされる。「近松時代浄るりの論理と方法」「近松時代浄るりの構造と方法」「近松時代浄るりの思想と方法」の三部作では、身替りの趣向を世話浄るりと対照し、時代悲劇として評価している。そして、古浄るり以来の浄るりの結句に検討を加えることによつて、時代浄るりの「公的性格」を明らかにし、その結句に表わ

されている時代浄るりを一貫する構想を論じている。「近松時代浄るりの発想と人間像」「王朝物の方法」は三部作を補いつつ、悲劇論・形象論を展開している。「近松が描いた俊寛について」では、様々の作品に形象された俊寛との比較を通して『平家女護島』の俊寛像を浮彫し、「国性爺合戦」では、自作を変形しつつ一曲を構想する近松の方法を踏まえた出典研究を要請している。

第二章では、世話浄るりを対象にし、『今宮の心中』論、『冥途の飛脚』について、「近松が描いた八金〇の世界」では、広末保氏の「近松序説」にいう従属的悲劇の検討を行ない、「近松世話浄るりの結句」では、結句の分類を通して世話浄るりの性格が分析される。「堀川波鼓」小考」では実説との関りからお種の救済を論じている。

第三章では、在野の研究者木谷蓬吟の業績が研究史的に位置づけられ評価される。向井氏は蓬吟を理論と実践を一体化しえた最後の研究者と論じている。近松の全体像を描き出そうとした蓬吟の軌跡は、向井氏の考察によって今日の個別専門化し、拡散した近松像しか持たない研究状況に対し、批判的たりえたといえる。

第四章では、語り物文芸の形成、展開の諸相が景清を対象に

論じられる。「語りものにおける景清像の展開」では、向井氏自身の現地踏査を通して景清伝説の形成過程が論じられ、「幸若舞曲『景清』の論」では、幸若の構想を観音靈験譚に求め、呪術宗教的な語りの方に注目される。「卅三所観音靈験記『悪七兵衛景清』」「景清の系譜」では、講談をはじめ語り物の中で様々に展開をとげていく景清像が追求される。

向井氏は近松の歴史的展開に作品に位置づけ評価する姿勢を貫ぬき、時代と世話の問題も、既にその時代浄るり論の中で具体的に論じている。常に近松の全体像を模索し続ける巨視的な視座を貫ぬいてきた向井氏の方法が本書を支えている。

(桜楓社刊／昭和五二年九月二五日発行／B五判／二四三頁)

二八〇〇円)

(山田和人)

広川勝美編著

『神話・禁忌・漂泊』

物語と説話の世界

本書は、記紀神話から、源氏物語、伊勢物語等の物語、日本霊異記、今昔物語集等の説話集、他に平家物語・説経節等といった古代から中世にわたる広範囲な作品群を対象としている。しかし、個別の作品研究を並記するための論集として本書が編

まれたのではない。その意図するところは「神話・禁忌・漂泊」という書名が示すように、聖性とそれにあらがうものとの絶えざる緊張関係において成立している神話論的世界に繰りひろげられる犯しや流離、そしてついにはその聖性が喪われていく過程、そこに新しい文学の様相が展開していくという、いわば文学史を構想する視点において貫かれているのである。

序章広川勝美氏の「神話的なもの両義性」は、本書全体の方向づけを指し示すとともに、祭儀空間において語り出される神話の言語空間としての構造を明らかにしている。

第一章「神話と民俗の世界」では駒木敏氏が、まず「アラブル神・日本的神性」で日本における神性のありようを、「聖なる婚姻と始祖伝承」で神話における婚姻の意味を、そして「変身空間としての他界」では民話の類型との比較を通じて記紀の他界訪問譚の性格をそれぞれ論じている。

第二章「物語世界の形成」では、「異郷への羈旅」で広川氏が、業平の東下りを皇統譜に連なりつつそれへの背反によって都から漂泊する姿として捉え、「色好みと擬似色好み」で菅野美恵子氏が、業平と平中との色好みの差異を禁忌への犯しという視点から論じ、「聖なるものの末裔」で広田収氏は、孤児・申し子・継子譚を神話論的な構造において比較しそれぞれの位

相を明らかにしている。

第三章「源氏物語世界の構造」では、まず広川氏が「光源氏物語、反神話論的始発」で、禁忌に背反する神話的系譜に源氏物語を位置させながらも人間を凝視する物語の方法への変容を指摘し、さらに「宇治物語の時空」で神話論の世界から仏教的世界への源氏物語の転移をとらえている。そして久保田孝夫氏は「なからひとゆかりの紐帯」で、源氏物語が物語としての系譜に連なりつつ自らを形成していく軸として、なからひとゆかりという観点を措定し、広田氏は「六条院の構造」で光源氏の物語の転換を六条院という場の考察によって明らかにしている。

第四章「説話世界の形成」では、広川氏が「罪悪観の成立」で、日本霊異記が個人の内面に罪悪としての悪業を発見したことを述べ、今井昌子氏は「聖・俗・賤」で、霊異記に描かれる聖、ことに賤しい隱身の聖に注目し、それを在地の衆生の救済の問題として追求し、「死霊滅罪・説話と語り」で生形貴重氏は、平家物語の重衡譚について平家諸本の比較考察から琵琶法師の語りが重衡像の形象の方法としてあったことを指摘している。

第五章「説話世界の変容」では、まず生形氏が「回心と物狂い」で、今昔物語の出家譚に中世説話の主要な担い手である聖たちの苦悩を発見し、「彼岸への距離」で小関真理子氏は、救

済を希求する聖たちが、しかし絶えざる自己矛盾に苦悩する姿を往生譚の生々しい一面として摘出し、最後に生井武世氏は「代受苦者の風貌」で、説経信徳丸が本地譚の発想と方法をひきつぎながら、実は単なる本地譚をのりこえ、代受苦者としてのありようを発見しようとする民衆の姿勢をそこにみている。

以上のように多数による多岐にわたるそれぞれの研究が、しかし個別のものとして分断されず、新しい文学観、あるいは文学史像をめざす共同の研究として構想されている点に、本書の価値と可能性があると思われる。

(桜楓社刊/昭和五十一年五月二十五日発行/A四判/二三三頁/
一八〇〇円) (谷 口 広 之)

広川勝美編

『土くれの語り部たち』

遍路と木地師と地芝居と

この書物は同志社大学国文学研究室内の「伝承と文芸」研究会が最近五年間行ってきた調査によって得た共同研究の成果のひとつである。副題の「木地師・遍路・地芝居」という三つの対象を個々に論じるのが目的のではなく、共通して前近代の文化に固有の論を探ろうという試みであるように思われる。し

かも、従来の民俗学の方法にとどまっていることを望んでいるのではない。文字言語によって書かれた文学を貫く音声言語による伝承の基層構造を浮かび上がらせようという構想がうかがわれるのである。「つちくれ」は柳田国男を、「語り部」は折口信夫の方法を象徴しているのではなからうか。この異質な二つの方法をどう媒介しうるかという問が書名には隠されていると見たい。

序章を読み始めるとき、ついこのあいだまでの日本の村がいかに厳しい生活の下に置かれていたかを想像せずにはいられない。広川勝美氏は土くれにおいて生産するムレがどのようにカタリ始めるのかということ、きわめて衝撃的な発見を通して論じる。この書物がくつがえそうとしているのは、「ふるさと再発見」の観光宣伝によって醸成された村の姿である。

一章では谷口広之氏が、遍路を単に近世のものとして限定するのではなく、時代を通じて共同体から排除されるムレに連なる姿であるという原理を強く打ち出している。こうした漂泊者とこれを追い出し続ける定住者とは対立しているのではなく、「接待」という善根を媒介にして交流している関係を明らかにしている。

二章では柳田洋一郎氏が、もはやその姿を見ることのできな

い木地師を探っている。人々の記憶の中に残る、賤視されつつ漂泊する山住みのムレがぎりぎりの生死の間に生きていたことを明らかにする。またムラの境界や周縁の意味を怪異の伝承から考えている。

三章では山田和人氏が、芸術としての演劇が純化していくとき失なったものを、地芝居を手がかりに見ようとしている。祭が、共同体に抑圧されていたものをひととき解放させ、日常の秩序を生き生きとしたものに蘇えらせる機能をもつと論じている。またムラに漂泊の芸能者たちが訪れ、人形にケガレを荷わせ排除させることもあった、として、芸能と演劇との起源を考えようとしている。

この書物が全体的に仮説的な素描にとどまっている点は、後に続くシリーズ『語り部の記録』の各巻において深められていくこととして期待したい。谷口・柳田・山田の三氏は本学大学院学生である。このように若い学徒に研究と報告との機会が与えられることは、発表の場の少ない関西においては願ってもないことであろう。また、個別専門領域を異にする者の共通の論議の場がより鍛えられていくことを強く望みたい。

(創世記刊、昭和五年九月一日発行/A四判/二六二頁/一

二〇〇円)

(広田 収)